

宰府画報

第25号

2025年1月
(令和7年)

発行 市会課
宰府員財
育委
太教文



バックナンバーはこちらから

逸品探訪

蓬萊山図

吉嗣梅仙作

幹をしならせて伸ばす1本の松と、白い花を咲かせる2本の梅。岩肌には笹があり、山あいにはほんのりと紅色を帯びた雲が漂っています。鶴が飛来し、波の上には尾の伸びた霊亀までもが描かれて、まさにめでた尽くしの図様です。

の始皇帝が徐福を遣わしてこの山を探させたという伝説は有名です。日本では霊山のイメージから富士山の異称にもなり、餅や伊勢海老などの縁起物を盛った床飾りを蓬菜と呼んだりもします。詩書画においても縁起の良い主題として好まれますが、絵画で蓬萊山図を見分けるポイントは、高くそびえる山に松竹梅と鶴亀があり、それが海(波)とともに描かれていることです。海の代わりに巨大な亀の背に山が乗る図柄で描かれることもあります。

吉嗣梅仙は、江戸時代後期から明治半ばにかけて、およそ60年もの長きにわたって精力的に活動していたことが、太宰府近郊や嘉麻地域の神社などに多く残る絵馬から知られます。絵馬では鮮やかで迫力ある歴史人物画を描き、掛幅でも歴史や神話を題材とした作品を描く一方で、本作品のような穏やかな雰囲気の水図や花卉図、恵比寿大黒図などもあり、需めに応じて多彩に腕を揮っていたことが窺えます。掛幅を床の間で鑑賞する機会はすっかり減り、現代の生活で掛幅はもっぱら美術館で鑑賞されるものとなりましたが、季節ごとの風情を増すために掛け替えられ、また長寿や出世、商売繁盛などの願いや祝意が込められていたことについて思いを廻らせてみると、個々の作品の魅力はより深まるでしょう。



紙本墨画淡彩 掛幅装 149.8 × 68.4cm 明治22年(1889)
吉嗣家資料

画面の右上には高々と「己丑春日写 七十三翁 樸儼(梅仙)」と墨書されます。すでに古希を過ぎた梅仙の、さらなる長寿を願う思いも感じられます。

(井形栄子)

調査見聞

上官周の模本

じょうかんしゅう

古画の写し

吉嗣家には落款、印章のそなわった書画のほか、完成作品未満の多様な書や画、拝山の手控帳の類もつたわっています。そこには多数の古画が写されており、中国の錚々たる人名も散見します。原画の形状は掛幅や画帖、画題は山水図、墨蘭図や芦雁図など、しばしば詩をともなつて、いかにも文人の作とおもわせるものが少なからず含まれています。

写された古画

ここではそのような古画の写しのなかでも珍しい一例をご紹介します。画題はまだ確定していませんから「この模本」と呼びます。

この模本は横に長く、画面は大きな川にせり出すようにそそり立つ崖にはじまります。川面には水流の激しさをあらわす波頭もえがかれています。その川に沿った道の傍ら、やや小高い場所に上方を見あげ

て談笑する人々があり、道のさきには楽しげな騎馬の人々がいいます。その風景と人物の表情や所作から特定の出来事をえがいたものと想像されますが、それが何かはわかりません。人物も植物も水波も柔軟な墨線で象り、草木の一部には墨、衣や樹木の一部には淡彩をほどこしています。種々の植物をえがきかける巧みさ、人物描写の的確さから原画は優れた作品であったと推察されます。

制作した画家

この模本の末尾には、墨書「辛亥秋日上官周写」と、朱書きの印章があります。上官周は清朝中期の在野の画家、書画に長じ、山水図や人物図を得意とし、歴史的著名人の肖像集『晩笑堂画傳』を刊行しています（新潮世界美術辞典）。日本の江戸時代の記録にも上官周の名やその作品名はみいだされ、かの頼山陽が上官周筆柳港晚景図の入手を望んだことも知られます（頼山陽書翰集）。

ただし、中国の画家伝や日本の記録をみるかぎりでは（国朝畫徵録、国会図書館デジタルコレクション）、この模本の原画は上官周の作品のなかでは異色の作とおもわれます。

写した画家

ではこの模本をつくったのは誰でしょう。風俗図のようなその図様は拝山の父梅仙の好みに近いとおもいます。しかし朱印を朱線で写しとる例は拝山にあり、日本の文人たちの上官周への関心からも、この模本が拝山の手になる可能性も否定はできません。

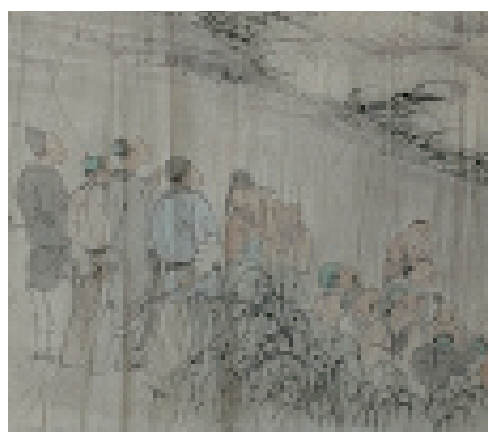
このように古画の写しは、もとの画とこれを写した画のそれぞれに、また両者をむすぶ道筋にも幾多の問題がひそんでいます。その考察は画と画家にとどまらず、この模本の場合には吉嗣家や当時の文人たちの活動のより深い理解をも齎すでしょう。

（小林法子）



紙本墨画淡彩 39 × 232.6cm

吉嗣家資料



部分図

いちまい

画稿鑑賞

齋藤家資料

舟

行

図



紙本墨画 30.8 × 45.8cm

船頭が漕ぎだした小舟に乗るふたりの男性。船首に腰を下ろした男性は、天秤の荷物を下ろして、たばこに火をつけほつと一息。もうひとりの初老と見える人物は、野菜と魚を結わえた担い棒をかついだままで、杖をついて立っています。やれやれ間に合った、さて腰を下ろそうかの、といった感じでしょうか。商いの品をよく見てみると、天秤のかごには松、梅、福寿草の鉢植

えがあり、担い棒に下がっているのは大きな鯛と二股大根（豊穰や男女和合の縁起物）です。舟には小さな松飾りも描かれていて、正月を寿ぐ主題とわかります。その一方で、舟の左上を見上げると、遠くの空を飛び行く鳥の群れがあり、たそがれに向かって進む舟には一抹のさみしさも感じます。

水気を含んだ筆でさつと描かれた松飾りのある小舟や、歳の市で担い棒に魚を下げて売り歩く人物など、齋藤秋圃70歳作の《十二か月風俗図絵巻》（九州歴史資料館所蔵）によく似たモチーフがあり、小柄で柔和な雰囲気をもつ人物や、たばこの煙や波の表現に見られる緩急のある筆づかい、浅い斜め線を意識した画面構成などは、いずれも秋圃の特徴をよく示しています。

裏面には「秋圃」、「梅圃蔵」（別筆）という墨書とともに、「秋」の字が3回繰り返して書かれています。これを下描きにした作品ができあがり、署名を入れる前に試し書きをしたのかとも想像されます。画稿といえども秋圃の力量が存分に発揮され、しみじみとした味わい深さを感じる一枚です。

（井形栄子）

メイショ
メイブツ

光明寺無準堂の扁額



無準堂の扁額

年間通じ多くの人で賑わう太宰府天満宮参道を一本東に外れると、九博通りという静かな通りにでます。ここに位置するのが鎌倉時代創建と伝わる臨済宗東福寺派の光明寺です。庭園は昭和を代表する作庭家重森三玲が作ったもので、県指定文化財にもなっている名勝です。光明寺境内北側の鐘樓の隣にあるのが無準堂と呼ばれる建物です。光明寺の由緒と関わりのある南宋の僧無準師範を祀ったもので、中には寛文5年（1665）に作られた渡唐天神・無準師範・鉄牛円心（光明寺開祖）の木像が安置されています。



無準堂外観

毫であることが分かります。現在のお堂は昭和15年（1940）に新築されたため、扁額は拝山存命時（大正3年以前）に作られ、前身の無準堂に掲げられていたと考えられます。前身建物の詳細は不明ですが、木像の墨書から、安置された寛文5年当初から無準堂はあったようです。

明治期以降、吉岡拝山や鼓山が催す展覧会の会場として光明寺（当時は威徳寺）が利用されることもあり、文人の作品が集まる場所でもありました。この扁額は、拝山と光明寺の繋がりを示す貴重な資料です。（木村純也）

関係者
名鑑

Vol.5

みやがきのぶまる
宮垣暢丸

生没年 文久2～昭和18（1861～1943）
関係者 吉嗣鼓山 萱島秀山

プロフィール

江戸時代まで、原山無量寺（原八坊）を中心に太宰府天満宮の祭祀を司っていた社家の一つ、常修坊の出身。国学院大学に学んだ後、太宰府天満宮に神官として奉職し、連歌祈祷の連衆を務めたほか、優れた歌や書の才を活かして多くの作品を残した。



宮垣暢丸筆「飛梅」と
夫妻の記念写真

大正12年（1923）5月15日、久爾宮邦彦王のご一家が太宰府天満宮に参拝されました。長女の良子女王が皇太子妃に内定し（後の昭和天皇妃）、ご成婚の前に、ご家族揃って西日本を巡る40日間の旅に出られ、太宰府天満宮にもお越しになったのです。この時、神官として祓行事を担当したのが宮垣暢丸でした。楼門前での修祓に続き、文書館に場所を移して、萱島秀山、吉嗣鼓山、藤瀬冠軒とともに御前



慰問揮毫で「龍驤」の二文字を
書く暢丸

で揮毫を行い、暢丸は和歌を献上しました。天満宮には明治末から昭和初期にかけて多くの皇族が訪れましたが、太宰府の絵師や書家たちは、そうした機会にしばしば御前に召され、文書館を舞台に揮毫の栄に浴しました。

時代がうつり、昭和15年（1940）に撮影された写真には、九州日報社（福岡市中島町）へ招かれた大勢の傷病兵の前に、慰問に訪れた暢丸が大きな筆で揮毫をする姿が残っています。この時書いた「龍驤」の2文字は、登り龍のように勢い盛んなさまを表す漢語で、昭和6年に進水した航空母艦の名前でした。揮毫の文字選びにも、世相が反映されていることがうかがえます。

（井上理香）

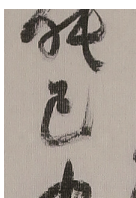
ひとこと
くずし字

【巳と己】

新年を迎え、へび年になりました。蛇は脱皮をすることから復活と再生の象徴とされ、縁起の良い年と言われます。今年は干支でいうと「乙巳」になりますが、「巳」は年代を示す語として書画作品の落款に多く見られます。【画像1】のように、あまりくずれず原型のまま書かれることが多いです。



【画像1】



【画像2】

この「巳」と非常に似ていて、間違いやすいのが「己」という字です【画像2】。「すでにやむ」などと読み、

「巳」と比較すると、左上の線がくっついていないかの違いしかなく、くずし方や字形で見分けることはほぼ出来ません。「巳」は年号を現す際に使用されることがほとんどで、「己」には文中に見られることが多いので、文意からどちらか推測するしかありません。

今回紹介したのは8名の文人による合作《扇面貼交屏風》にある高山雪叟作の山水図。雪叟は豊後日田の西光寺の住職で、画を長崎の南画家木下逸雲

に学び、日田の文人平野五岳とも親交がある人物でした。

今から120年前の明治38年（1905）も「乙巳」年ですが、当時は日露戦争の真っ只中。山水図の賛文には旅順湾での戦いについて書かれています。

（木村純也）

この資料



高山雪叟作 《山水図》
紙本墨画淡彩 扇面 18.9cm 最大幅 55.3cm
明治38年 吉嗣家資料

編集後記

私事ながら今年は年男。『宰府画報』をはじめ、絵師調査事業をますます盛り上げていきたいと思っています。（木）
2025年に25号となった『宰府画報』。菅原道真公ゆかりの数字にあやかっているからも充実した紙面づくりをしたいと思っています。（井）